
神様、教えてください。

林道翔香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様、教えてください。

【Nコード】

N6987T

【作者名】

林道翔香

【あらすじ】

私は太田沙織。今年で十五歳の受験生。

この十五年間で、私は一度も「恋心」を抱いた事がない。

なのに、あの男の子から目が離せない――。

なに、この気持ち。初めて抱いたこの感情はなに？

神様、教えてください――。

恋愛物語です。主人公の想いに共感してくれれば嬉しいです。

1 いつもの日常(前書き)

誤字、感想などジャンジャン書き込んでください！
一人二人の意見をぜひ、参考にさせていただきます（＾＾；）

1 いつもの日常

私は十五年間、「恋心」というものを抱いた事がない。

男の子とは、普通に話していれば楽しかったので、それ以上の関係を求めた事がなかったからなのか？

男の子に特別な感情を抱いた事がない。

なのに、なぜだろう？

あの男の子から目が離せない、いつまでも見続けていたいと願うこの気持ちにはなに？

心の奥底から感じた事のない感情が湧き上がってきて、あの男の子が笑うと爆発しそうだ。

これはなんだろう？

神様、教えてください——。

私は太田沙織。おおた さおり

クラスは三年三組。今年で十五歳の受験生だ。今まではテニス部での部活に励んでいたが、もう引退してしまい、今度は勉強に励む時期。

「沙織。休み時間くらいお話しようよ？ 受験生なのは分かっているけど——」

「悠里は少しくらい焦った方がいいよ。勉強しなさ過ぎ、昨日何時間勉強した？」

「……一時間」

「ほら、受験生にもなって一時間は少ないよ」

今話しているのは、私の親友の金沢悠里。かなざわ ゆうり 同じ三年三組で、同じテニス部だった。テニスは強いくせに勉強にはめっぼう弱い。もっ

とも、勉強時間が短いからだと思うが。

「沙織ってば、この頃全然かまってくれないよね。寂しいな、前までは部活の話であんなに盛り上がったのに……。部活を引退すると、こんなに変わっちゃうの？」

「どうしたの、悠里。なんか、急にしんみりしちゃって。だって部活はもう引退しちゃったんだから、高校まではできないんだよ？ 話したって、前みたいには楽しめないよ」

「そうかもしれないけどさ、思い出に浸ってみるのもよくない？」

悠里は本当に焦る事を知らない。テスト三日前までは提出物にも手をつけないほどで、前日に泣きながら私に助けを求めていたな――。これも一つの思い出だな。

「沙織ちゃん。また悠ちゃんを泣かせてるの？」

「智樹。ってか、またってなによ、またって！」

「だって、沙織ちゃんのイメージはそんなもんだし……」

「イメージで決めるの、やめてもらっていいかな？ 腹が立つかな」

「冗談だって、怒らないでよ」

こいつは長谷智樹^{はせ ともき}。同じクラスでバスケ部だった。とんだお調子者で、女子にはとてもなれなれしい態度で寄ってくる。こういう男子は本当に苦手だ。でも部活は真剣だったみたいで、部長をやっていた。誰からも頼りにされていた、部活の時だけ。悠里にしゅっちゅう絡んでくるので、もしかしたら悠里の事が好きなのかもしれない。女の勘ってやつだ。悠里は、智樹の事気になっている存在らしい。早くこの二人がくっついて、どっかへ行ってくれたら多少気が楽になる。

「沙織。勉強に集中するのは構わないけど、ちょっとは悠里の事も

気にしてやれよ」

「健斗？ 健斗までそんな事言うの？」

「うん。だって、さっきまでのやり取り見てたら沙織の態度が素っ気なかったから。ま、悠里も沙織の邪魔はしちゃいけないな。集中してる時には」

なんでちょっと笑ってるの？ なにを楽しんでいるのかさっぱり分からない。ちなみに、こいつは松谷^{まつたに}健斗^{けんどう}。同じクラスで、陸上部。学校一足が速いので、女子にモテる。さらに、性格がいい上にムードメーカーなので、男子にもモテる。だから、近くに来られると女子の視線が痛いほど感じる。私は、うつとうしくなった栗色の長髪を、紺色のゴムでポニーテールに縛った。同時に、気合も入れた。でない、この三人に存在を支配されると思ったからだ。

私達四人は、幼稚園からの幼なじみ。同じ小学校に行き、同じ中学校へ通っている。毎日毎日顔を見合わせるのも、さすがに疲れてくる。私だけかも知れないが。

「沙織？ なに、ボーっとしてんの？ 大丈夫？」

「大丈夫よ。今日はいい天気だったから、外を見てたの。ありがと、健斗」

「いや、あの二人がいい雰囲気だったから沙織しか話し相手がいない」

「私は忙しいの。他の女子とでも話してくれば？」

「やっぱ冷たいな。勉強の疲れがたまってるんじゃないの？」

健斗は本当に優しい。ただ、その優しさが時々面倒くさい。私はそんなに冷たいだろうか？

今日の空は雲一つない快晴。まるで、悩みなんて一つも感じさせない笑顔のようだ。私の心も、あの空のように澄みきっていたらよかったのに……。

ふと周りを見た。健斗は女子ではなく、男子と話していた。智樹と悠里は盛り上がっていて、とても楽しそうな雰囲気。健斗の言うとおりで。今あの二人の間に入ってはいけない気がする。

『キーンコーンカーンコーン』

授業が始まるチャイムだ。皆が、慌てた様子で自分の席に座る。

「おし、数学やるぞー。教科書の……」

いつもと変わらない授業がまた始まる――。

1 いつもの日常（後書き）

このような感じで、更新していきたいと思っています。
どうか、ご声援のほどお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6987t/>

神様、教えてください。

2011年10月9日18時27分発行